

発刊に寄せて

平成30年1月5日のNHKニュースで「男の子の将来の夢」1位は15年ぶりに「学者・博士」との報道がありました。これは、ある生命保険会社が「大人になったらなりたいもの」のアンケート調査で、日本人が3年連続でノーベル賞を受賞したことなどが影響しているのではないかとみているということです。このニュースは、中学校理科教育に携わる我々理科教員にとっても大変喜ばしく、自然の事物・現象に疑問を持ち、新たな課題を解決するための好奇心と意欲が子供たちに育っている事の証しではないかと考えます。

さて、既にご存じの通り昨年3月31日に幼稚園教育要領及び小・中学校指導要領が公示されましたが、今回の改訂では、中学校の段階として各教科の学習を通じて身に付ける資質・能力の全体像を明確化することが求められており、改めて、理科における「見方・考え方」や理科で育むべき資質・能力の検討が迫られています。

本教育研究会においても、「主体的な探究活動を促す理科指導の工夫」を研究主題として、自然を科学的に捉え、課題意識をもって、主体的に探究すること（見方・考え方）を通して、科学的な資質・能力を育む研究実践を各地区で積み重ねてきました。

今年度の県栗原大会は、午前中、小・中共同で、中学校1年の理科の教科書に写真等で大きく取り上げられている栗駒山麓崩落地（平成20年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震に伴う崩落）を実地踏査しました。地滑りの現場を実際に見聞することで、多くの参加者が地殻の変動の様子が身近なところで起こっているということを感じることができたようです。午後からは、志波姫中学校を会場に授業公開を行い、課題解決的授業について、主体的、対話的で深い学びを目指した授業のアプローチとして、素晴らしい授業の提供であったとの声が多数寄せられました。また、後半には、4地区から学校での授業実践を中心とした活動の取組の成果を、発表をさせていただき、参加者から明日からの授業に生かすことのできる話を聞けたとの反響がありました。

本研究紀要には、各地区の取組や県大会での発表資料、全国中学校理科教育研究会北海道大会の発表者である涌谷中学校の白戸剛司先生の資料等も掲載しています。理科に関する情報や授業実践を県内の先生方で共有することで、科学の楽しさや不思議さを肌で感じ取る実践が更に積み重ねられ、理科好きの生徒がますます増えていくことを期待しています。

平成30年3月

宮城県連合中学校教育研究会

理科研究部会長 佐々木 勉